

塩津港遺跡から出土した小型の神殿部材

1. 塩津港遺跡の神殿

塩津港遺跡ではこれまでの発掘調査により神社遺構を検出しています。神社建物は 11 世紀の本殿が $3.4m \times 4.6m$ (二間×三間) の掘立柱建物、12 世紀の本殿が $2.7m$ 四方の土台に乗る建物となっています。これらの建物に伴う建築部材は、構造材として掘立柱の柱、屋根材として瓦・檜皮、壁材としてスギ薄板などが出土しています。

現在、整理調査を進めていますが、これらの建物のものとは大きさが異なる神殿の部材が多く出土していることが確認されました。

2. 小型の神殿部材

出土品はおよそ 11 世紀後半から 12 世紀末までに存在した建物の部材です。部材が出土した遺構の時代が異なるところから、百数十年の間に複数の建物が存在していたと想定できます。いずれも小型であることが特徴で、高欄を取り付けた建物は 1 辻 70 cm 程度の大きさを想定することができます。また、小型の金銅製装飾具も数多く出土しており、金銅製品で飾られた建物もあったと考えられます。

1) 高欄（欄干）（こうらん・らんかん）

北側の堀から高欄の一番下の部材である地覆材と束柱が組み合わさった状態で出土しました。架木（ほこぎ）と組み立てた状態で復原しますと高欄の長さは 84 cm 、高さは 10 cm 程度と推測されます。神殿の側面に付けられていた高欄とすると、その大きさから神殿は一回り小さい 1 辻 70 cm 程度と推定することができます。

2) 反りのある垂木・金銅製垂木先（たるきさき）金具

反りのある長さ 35 cm 、 2 cm 角の材です。小さな屋根の垂木となります。この垂木を受ける部材も出土しています。

金具は角材の先を包み込むように飾る金具です。中央を釘で打ち止めた金銅製の薄板でこの金具から推定される角材のサイズは 2 cm 角で、垂木材の大きさと一致します。建物の軒先を金色に飾っていた様子がわかります。

3) 金銅製飾り金具

幅 2 cm 、長さ 9 cm の金銅製飾り金具です。唐草文をあしらい、空間は魚々子地を施すなど、細かな文様が精緻に刻まれています。両側には取り付け用の釘穴があります。主に建物の横材を飾る金物で今も神殿や神輿金具に同様のものを見るることができます。大きさから、細い横材が想定されやはり小型の建物を飾った金具となります。

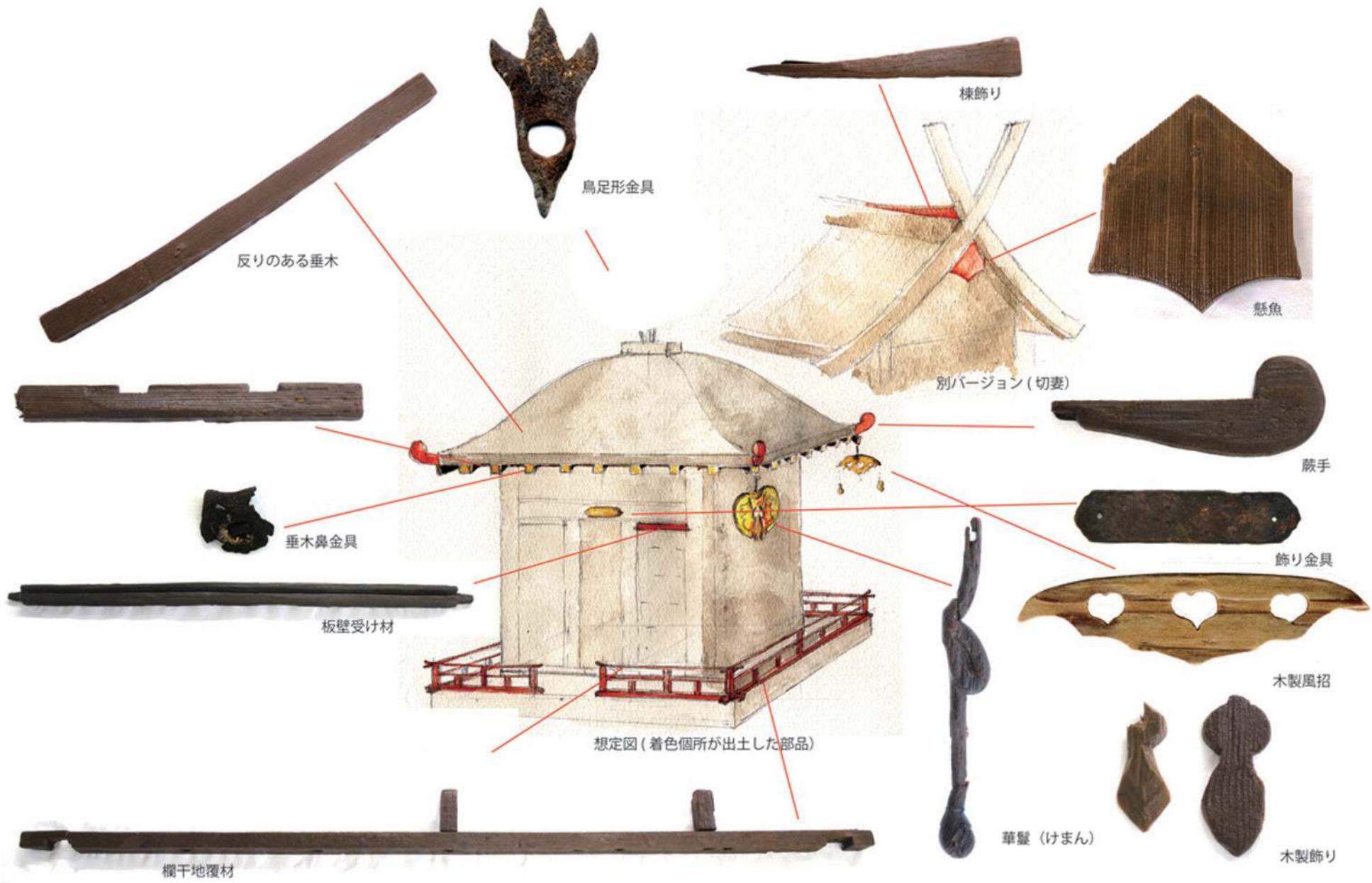
4) 懸魚（げぎょ）

屋根の押（おがみ）の下に装飾的に取り付ける木製の板です。高い装飾を施す懸魚ですが五角形をなすこの形状は、梅鉢（うめばち）懸魚と呼ばれる最もシンプルな形状で、絵巻によくこの形の懸魚を取り付けた建物が描かれているのを見ることができます。高さ 13.5 cm、幅 12.4 cm のサイズは通常の大きさは建物の懸魚としてはやはり小さいものです。神殿を飾ったとすると屋根の形状は切妻の形状が考えられます。

以上が主な出土部材です。想定できる建物が小型で装飾性が高いところから、神の建物である「神殿」の部材と考えられます。検出された神殿遺構から推測できる神殿よりはるかに小型であるところから、本殿内に置かれた「宮殿（くうでん）」、本殿とは別に設置された「祠」、神の乗り物である「神輿」などを想定することができます。また、既に公開している「金銅製鳥足形金具」「華鬘（けまん）」「木製風招」などはこれらの神殿を飾っていた可能性があります。

他にも小型神殿部材と想定できる遺物が数多く出土していますが、部位が判然としないものが多く、さらなる調査を必要とします。

現存する神社本殿で最も古いのは宇治市の宇治上神社で平安時代後期とされています。発掘調査で神殿の部材が出土した例は他ではなく、当時の神社施設を調査研究していく上で貴重な資料です。



出土した各部材の想定位置 (各部材のスケールは不定です)

2009.08.07

塩津港遺跡出土建築部材に関する覚書

神戸大学 黒田龍二

1.基礎的事項

塩津港遺跡出土建築部材は、大きさからするとごく小型のもので、小型本殿の部材とも神輿の部材とも解することができる。しかし、以下に記すような理由で神輿の部品ではなく、主要部材の大半は本殿の建築部材であると考える。

2. 高欄の地覆（じふく）と架木（ほこぎ）

地覆には地覆同士を直角に組み合わせる仕口があり、その間隔が 840 ミリである。

A. 本殿のものであるとしたとき、これが側面の高欄であるのか、正面の高欄であるのかによって、規模が大きく異なる。

(イ) 正面のものと考えた場合、中央の階段を挟んで両側にこの長さの高欄が来るので、正面の縁の幅は、 $840 \text{ mm} \times 2 = 1680 \text{ mm}$ と、これに階段の幅が加わるので 2m をゆうに超える幅となり、建物自体も大きくなる。これはほかの部材と整合しない。

(ロ) 本殿側面のものとした場合、側面の縁幅が 840 mm となる。この大きさで現存本殿に該当するものをさがすと、これほど小型のものは少なく、岡山県本蓮寺番神堂西祠（重要文化財、1500 年）がほぼこの大きさである。

B. 神輿のものとした場合はどうか。年中行事絵巻にはいろいろの型の神輿が描かれている。また、重要文化財の神輿も参考になる。これらに共通しているのは、神輿の縁の端には周囲に屏のようなものがつく場合が多く、高欄は少ないとある。また四方つまり前後、左右に切目があり、そこに鳥居が付く場合が多いことが分かる。

平面が四角のものはすべて四方の中央が切れている。しかし、この地覆は両端に地覆同士が組み合う仕口があるので、四方の中央が切れる型の神輿のものではない。神輿のものであるとすると。神輿の四面のうち少なくとも一辺は高欄が切れていない。高欄が切れていないと、その部分の本体は多分扉ではなく、壁となる。そのような神輿があるかどうかは分からない。

3. 垂木

本蓮寺番神堂西祠の地垂木とだいたい同じ。

4. 扱首束

本蓮寺番神堂西祠より高いが、番神堂では野屋根があって、外部の屋根が高くなっているが、この出土部材建物では野屋根がないかあるいは野屋根がもっと低いとするとこの高さの扱首で適合する。

5. 板墓股（断片）

本蓮寺番神堂西祠は、正面庇になかを刳り貫いた本墓股があり、輪郭の大きさは大体一致する。こちらは板墓股であり簡素であり、正面に飾ったとは思えない。西祠は側

面には臺股はないが、東祠には側面に臺股があるので、それを参考図とする。

6. 懸魚

大きさは本蓮寺番神堂西祠に近い。ただ現存重要文化財の小さい本殿ではもっと複雑な懸魚が使用されている。大型本殿である神魂神社本殿（島根県）、出雲大社がこの梅鉢懸魚である。また、年中行事絵巻の今宮神社の本殿も梅鉢懸魚である。いずれにしても簡素な本殿である。

7. 板壁受け材（敷居、鴨居）

これは現存建物ではありませんみかけない部材で、この用途は推定である。柱と柱の間の壁の下部または上部で壁を受ける材と推定される。長さは本蓮寺番神堂西祠の側面の柱間寸法に合致する。

神輿の材とした場合

(イ) 柱間中央に扉をつけるので、柱間三等分の脇の間の壁を受けることになる。そうすると柱間はだいたいその3倍の1.5mの大きな神輿となる。

(ロ) ひとつの以上の柱間を壁とする。この場合は、一辺が50cm程度の神輿となる。柱間が壁となる方向は高欄も切らなくてよいので、84cmの高欄が適合する。

8. 鬼板のひれ

本殿の棟の端に設ける鬼板の足元下部の部分と推定される。本蓮寺番神堂西祠のものと大きさはだいたい一致する。これを鬼板の一部と考える根拠は片面が仕上がっていないことである。

形は神輿の屋根の角の先端を飾る蕨手にも似ている。しかしこの材は、片面は面をとつて（角を削って）仕上げているのにたいして、その反対側は仕上げられていない。神輿屋根の蕨手であれば、両面とも仕上げなければならない。一方、屋根の鬼板であれば、正面側は仕上げ、背面側は檜皮ないしこけらの木口を納めることになるので、仕上げは必要がない。

9. 鳥衾

鬼板の上にのり、突き出す飾り。不整形の割れ方なので断定はできないが、ここに当てはめて不都合ではない。

11. その他の装飾物

鳥の足、ひも状のもの、木製飾り、兎の毛通しのようなものは以上で考察したものとは無関係なものと推定する。

12. 総括

部材寸法から、その全体の規模を導くことが目的なので高欄を基準に寸法が最も近い本蓮寺番神堂西祠を参考とした。その結果大体の部材がこの規模で納まることが判明した。この建物は室町時代の凝った作りなので、誤解を招くかもしれないが、懸魚から推定される出土部材建物ははるかに簡素なものである。また、滋賀県のことなので、流造である可能性が高いが、神魂神社のような妻入の建物である可能性もある。いくつかの仮定をもう

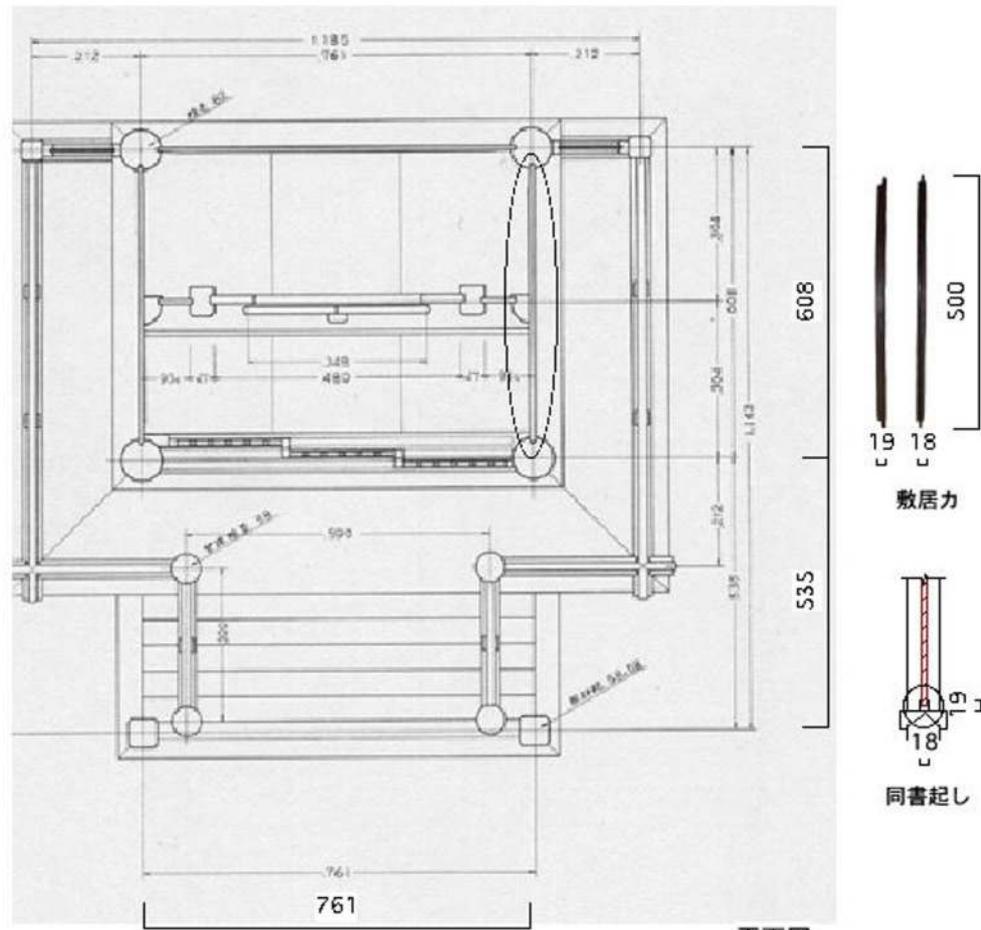
ければ、神輿の材とすることも不可能ではない。

以上の考察から、ここに挙げた部材は 1 棟の簡素な神社本殿、おそらく一間社流造、ないし春日造のものと推定される。年代は、出土地層から 11 世紀後半から 12 世紀とされる。現存遺構では 11 世紀中ごろの宇治上神社本殿（京都）が最古で、建保 7 年（1219）の神谷神社本殿（香川）、安貞年間（1227～29）の円成寺春日堂・白山堂がこれに続く。ちょうど現存遺構がない一世紀半ほどの空白期の遺構である。

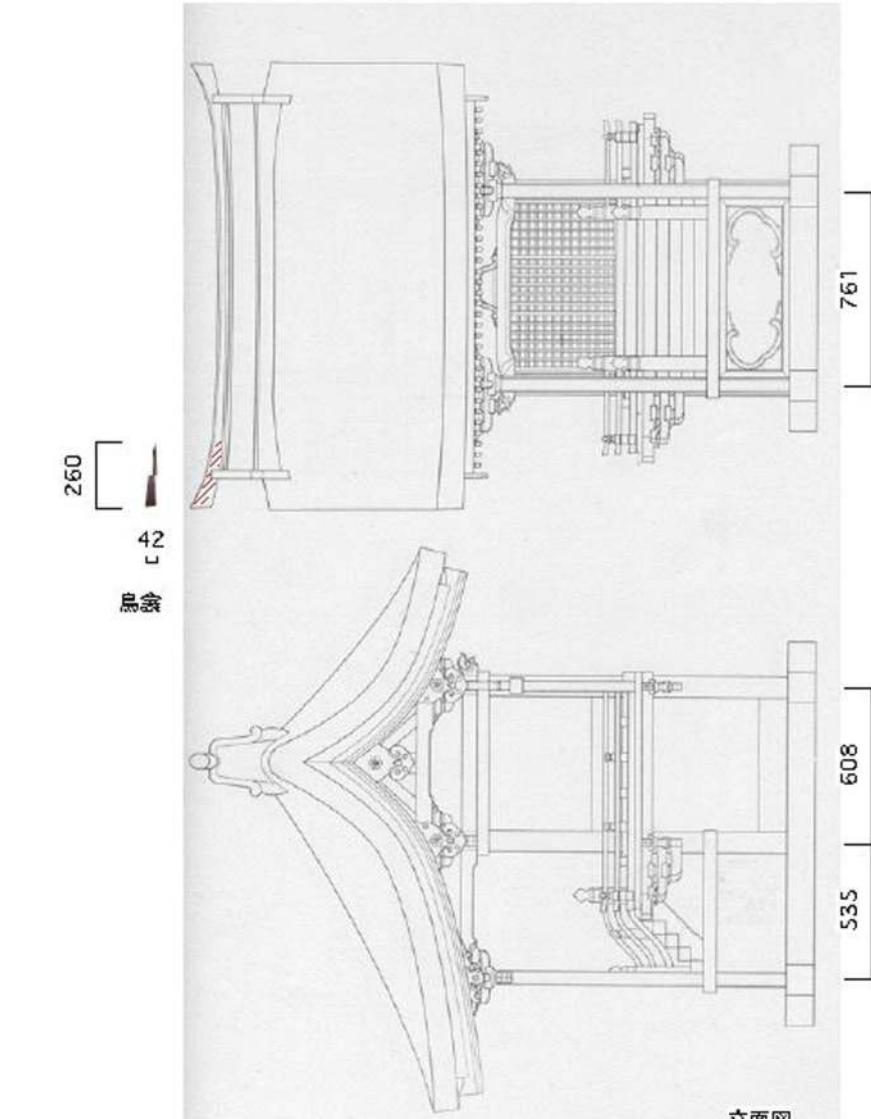
また、出土建築部材建物は、非常に簡素な建物と推定されるが、このような建物は現在まで残る割合が小さく、最古とみられるのは元亨 4 年（1334）の白山神社境内の 4 社（長野）まで下る。

神社本殿の建築部材の発見もおそらくこれが始めてであろう。

神戸大学大学院工学研究科 日本建築史 准教授 黒田 龍二

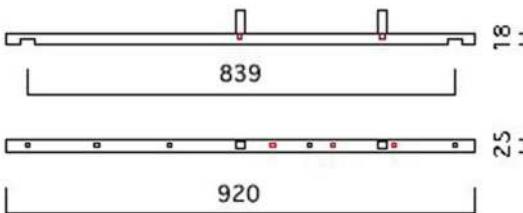
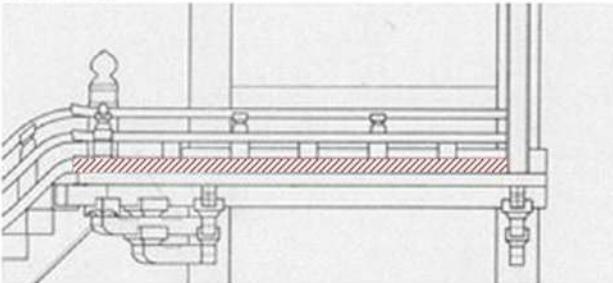


0 500mm



0 500mm

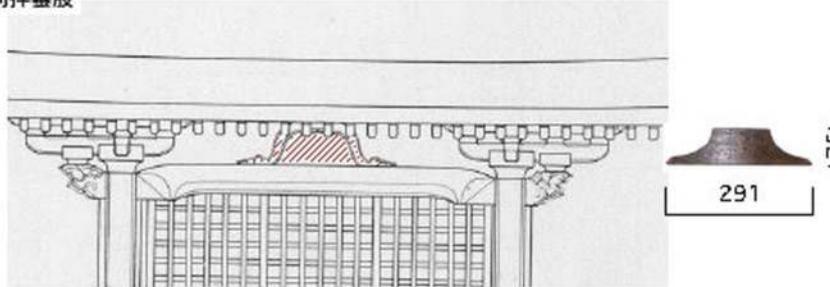
番神堂西祠 高欄



塩津港遺跡 高欄書し

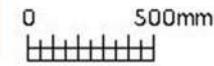
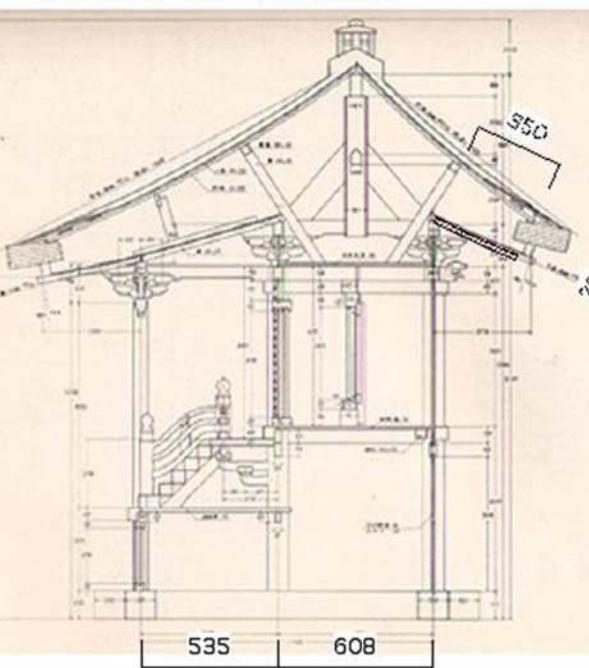


同向拝幕股

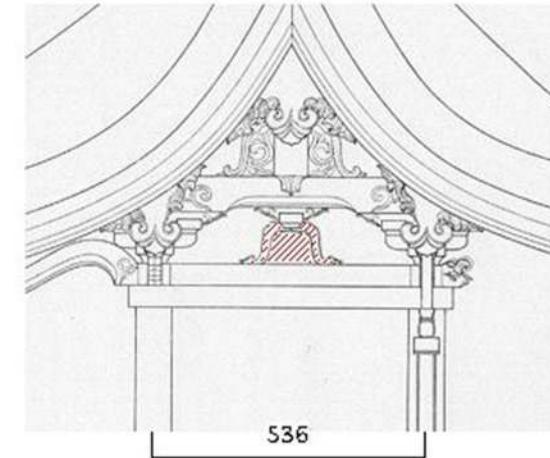


291

75

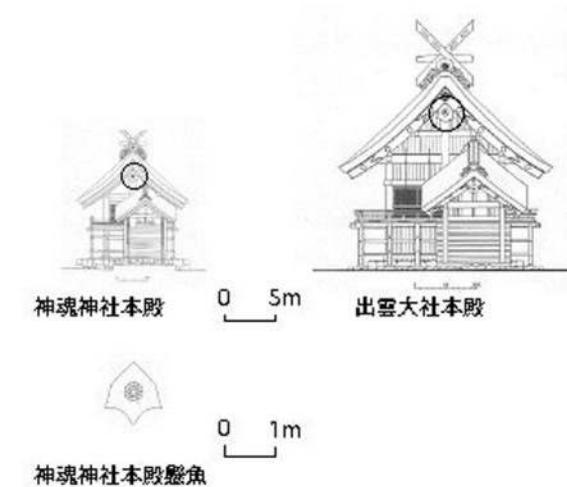
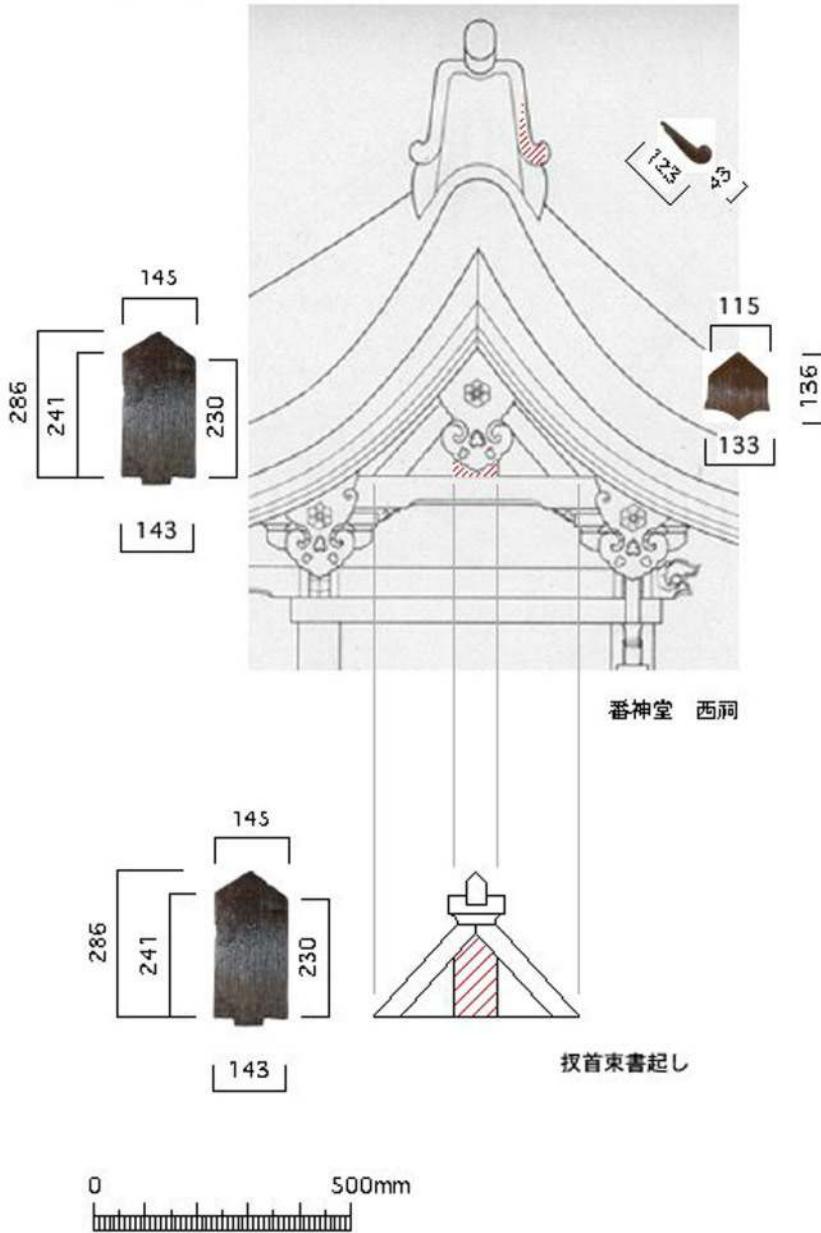


本蓮寺番神堂 東洞立面図（部分）



536

蕨手・懸魚・挾首束 S=1/10



今宮社社殿（『年中行事絵巻』卷十二）

図面は、
『重要文化財本蓮寺番神堂修理工事報告書』（重要文化財本蓮寺番神堂修理委員会、昭和39年）
『日本建築史基礎資料集成』1 社殿1（中央公論美術出版、平成10年）
小松茂美編、同・吉田光邦執筆『年中行事絵巻』日本絵巻物大成8（中央公論社、昭和52年。昭和57年再版による）